The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代指示副詞の研究
Author(s)	池上, 友子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44761
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【29】

氏　　名	池上友子（いけがみともこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18314　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	**古代指示副詞の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　金水　敏 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　助教授　岡島　昭浩

論文内容の要旨

本論文は、日本語の指示副詞（例「｛こう/そう/ああ｝する」）の類について、歴史的変化の観点を中心に記述を試みたものであろう。

第1章「序論（その1）」、第2章「序論（その2）」に続き、第3章「現代語の指示副詞」には1節「現代語コ系・ソ系・ア系の指示副詞について」2節「現代語の指示副詞の指示用法について」3節「現代語の指示副詞の副詞的用法について－コウ・ソウ・アアを中心に」が含まれる。また、第4章「指示副詞の指示用法の歴史的変化について」には、1節「指示代名詞の指示用法の歴史的変化について」2節「指示副詞の指示用法の歴史的変化について」3節「指示体系の歴史的変化について」が含まれる。続く第5章「古代語の指示副詞の副詞的用法について－カク・サを中心に－」には、1節「古代語の動作・作用の様態を表す用法について」2節「古代語の言語・思考・認識活動の内容について」3節「古代語の程度・量の大きさを表す用法について」4節「古代語の静的状態の様子を表す用法について」5節「副詞的用法の歴史的変化のまとめ」6節「歴史的変化における指示用法と副詞的用法の影響関係について」が含まれる。第6章は付論「ソ系・サ系列の曖昧指示表現と否定対極表現について」である。最後に結語「指示副詞の歴史的研究にあたって」を置く。また、参考文献一覧、調査した作品・使用テキストの一覧を付す（A4版横書き125頁、400字詰め原稿用紙換算で約450枚）。

序論に続き、第3章では、まず現代語の指示副詞についてその指示領域を確認するとともに、述語の修飾の仕方を分類・整理している。第4章ではまず指示代名詞の形態と指示領域の関係の歴史的変化を先行研究に基づきながら整理し、次に、指示副詞の変遷を、指示代名詞と対照しながら検討している。第5章では、指示副詞の形態の変遷を、修飾用法の違いごとに分類し、整理している。第6章では曖昧指示用法、否定対極用法の関係を知識モデルを用いて説明し、併せてこれらの歴史的変化について考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまでごく限られた論考しかなされてこなかった日本語の指示副詞について、体系的・網羅的かつ歴史的な観点から初めて本格的な考察を加えたものである。指示副詞は、そもそも「指示」表現としての特徴を持つ一

方で、述語を修飾するという副詞としての性質を持っている。指示をとっても、修飾をとってもその構文的・意味的本質が十分明らかになっていない上に、多岐多様に亙る資料を博捜して歴史的な変化を追いかけるという作業を伴うという点で、十分な困難が予想される。これに対し申請者は、周到な準備と方法をもって問題に対処し、結果として十分な成果を上げることに成功している。

申請者の方法とは次のようにまとめられる。まず、内省が可能で豊富な例が収集できる現代共通語の指示副詞を用いて体系を組み立てた上で、歴史資料に臨んでいる点である。この方法は、へたに用いると現代語の予断をもって歴史資料を見てしまうという誤りをも引き出しかねないが、細やかな分析によって共通点、相違点を慎重に洗い出すならば、望ましい成果を生み出すことができる。この点、本論文はまずまずの成果を出している。加えて、扱われている歴史的資料が極めて多様であり、しかも文献学的な扱いも妥当である点は、特筆に値する。

次に、比較的よく研究が進んでいる指示代名詞の研究史を十分に咀嚼し、その成果をふまえて指示副詞を分析している点である。この点は申請者のいう「指示用法」すなわち指示領域の分析に大いに生かされている。そもそも指示代名詞の研究史には申請者も貢献している点で、研究史の理解は十分であり、周到な準備のもとになされた研究であると言えるのである。

最後に、副詞としての修飾用法の分析にあっては、修飾先の動詞・形容詞の意味分類、修飾と補充の違いなど、近年の現代語を中心とした文法研究の成果が縦横に援用されており、議論が紛れることがなく、明確な体系性をうち立てることができている。

このように本論文は素材として画期的である上に、現代語、歴史的研究を横断する優れた国語学的論考であると評価できるのであるが、やはり問題の本質的な困難さゆえに、十分な達成を見ていない点も指摘できる。例えば、指示代名詞における指示と、指示副詞における指示とはどの点において共通し、どの点において相違しているのか、というもっとも深い原理的考察が十分でないために、記述が曖昧になっている箇所が散見される。特に第6章（付章）はその欠陥が端的に現れた箇所で、極めて意欲的な内容を持つにも関わらず、理論的達成度としては低いと指摘せざるを得ない。また、指示副詞と深い関係を持つ「こんな」のような指示形容詞、また「さり」「そうする」等の複合形式との関連も、さらに考察されるべき課題として残されている。扱われている資料が多岐に亙るという点について評価したが、しかしなお重要な文献で漏れ落ちているものもないわけではない点も指摘しなければならない。

とはいえ、これらの問題点も本論文の成果を本質的に損なうものとは言えず、博士論文として満足すべき水準に十分到達していると判断できるのである。

なお、2004年2月18日に本論文の公開の口頭試問を行い、最終試験を終えた。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。